『日本語学論集』第六号　二〇一〇年三月

『倭訓栞』研究の課題と展望

平井吾門

0　はじめに

伊勢の国学者谷川士清（一七〇九～一七七六）によって編纂が始められた『倭訓栞』は、近代国語辞書の成立に大きな影響を与えた辞書として知られており、国語辞書史の中でも重要な位置を占めている。活字本の普及によってその存在は広く知られるところとなり、『倭訓栞』は、現在なお近世語の研究などで頻用されている。しかしそれに比して、その編纂目的や成立過程に関しては、依然として研究が進んでいない状態にあると言えよう。また、従来唱えられてきた学説に関しても、ほとんど検証されないまま、後の論文や概説書などに流用されてきたきらいがある。

士清は晩年、未定稿が世に出ることを厭い、自筆の稿本や下書きの大半を「反古冢」なるものに埋めたとされる（注1）。このことから、『倭訓栞』の初期の編纂過程を研究するには限界があるとされてきた。しかし、二〇〇八年一二月に『谷川士清自筆本倭訓栞　影印・研究・索引』（三澤薫生編著）が刊行され、『倭訓栞』研究は新たな局面を迎えている。二〇〇九年が谷川士清生誕三〇〇年ということもあり、士清に所縁のある地元では、郷土の名士としてその業績を広めようという動きがますます盛んになっている。士清の知名度向上や諸研究が進もうとする今、『倭訓栞』研究の現状と課題を展望する。

1　従来の『倭訓栞』研究

これまでの『倭訓栞』研究は、「影印・翻刻」以外に、①戦前における谷川士清の総合的研究②書誌情報に関する研究③出典や記述に関する研究④成立時期や増補に関する研究⑤谷川士清の思想や交友関係に関する研究⑥後世への影響に関する研究、の六つに大別できる。

明治から昭和初期にかけて、谷川士清について総合的に記述したものがあり、士清の生涯や『倭訓栞』の概要が世に伝わることとなった。また、活字本が流布することによって（注2）、『倭訓栞』が近代以降も辞書として実際に使用されてきた。

その後、本格的に『倭訓栞』の成立を論じるのは北岡四良氏である。北岡氏は、士清及び『倭訓栞』に関する諸論考を発表し、その研究内容は近年の辞書史の概説書や解題などにも踏襲されている。特に、氏が計測した整版本『倭訓栞』前中後編の総見出し語数「二〇八九七語」は通説となっている。

一九九〇年代以降、『倭訓栞』を主題に据えたものとしては、三澤成博（薫生）氏の一連の研究を指摘できる。近年は自筆本や稿本との対照を積極的に行い、『倭訓栞』の節略の問題を取り上げている。また、従来『倭訓栞』を前中後の三編に分かつことは編纂当初よりの計画だったとされてきたが、自筆本の調査によって、当初は編を分かたぬ構成であった可能性を指摘している。

一般所の中にも、士清や『倭訓栞』の知名度向上を図る冊子が、三重県や郷土の有志などによって発行されている。士清の生涯や『倭訓栞』の概略、現在の谷川士清邸の様子や谷川家の家系図などが載せられ、『倭訓栞』誕生にまつわる世界に触れることが出来る。特に『近代国語辞典の祖谷川士清』（竹内令、二〇〇八）は、郷土教育で用いられることもあると聞くが、『倭訓栞』が一般的にどのように理解されているのかを知る良い資料と言える。

以下、部類別に①～⑥を概観する。

①戦前における谷川士清の総合的研究

『倭訓栞』は、伊勢国の谷川士清によって編纂が始められた。全九三巻八二冊の大著で、前編（巻一～四五）・中編（巻四六～七五）・後編（巻七六～九三）に分かれる。士清の没後一年から刊行が始まり、明治二〇年に後編が刊行されるまで、一一〇年の時を経ている。初回刊行は巻一～一三の一四冊であり、この巻一三までは士清が最終稿まで手を入れていることが推測される。それ以降は、士清と親交のあった者や子孫などの尽力によって編纂・刊行が行われており、それについては尾崎（一九八四）などに詳しい。

国学者や医者、歌人など多才な顔を持つ士清について、生い立ち、学問や思想の師弟関係や交友関係、著作などを紹介する伝記や紹介文は、明治期から刊行されている。『国学者伝記集成』（大川茂雄・南茂樹、一九〇四）や『谷川士清先生伝』（谷川士清先生事蹟顕彰会、一九一一）では、士清の著作として『倭訓栞』が挙げられている。また、『国語学書目解題』（赤堀又次郎、一九〇二）には、版本の刊記を抜き出した書誌情報が載せられている。

昭和初期には、加藤竹男氏によって『国学者谷川士清の研究』（一九三四）や「国学史上に於ける谷川士清の地位」（一九三九）などの論考が出されている。これらは、士清の思想を探り『倭訓栞』起稿の契機を明らかにするという面で大いに参考になるものであるが、『倭訓栞』そのものを詳しく扱ってはいない。『国学者谷川士清の研究』では、

また、ことに彼が国語學上には、或は通證に今の所謂四段活の前提を早くも示し得て、倭語の通音に言霊自然の妙を説き、かの本居宣長自身をして「頗有發明」と讃嘆さしめ、或は栞にひろく雅俗螢蘭の言どもを収容し、「我邦の古へは語を眞とし主とし本として字を假とし末とす」と五十音引を以て、同訓語を同項中に列ね、仮名遣を正しくしたなどの創見を立てた。（ペ九五）

として、士清の著作の国語学における意義を述べるも、『倭訓栞』に関しては「雅語俗語など多様な語を含む」「五十音引きの辞書である」といった特徴の指摘にとどまっている。

②書誌情報に関する研究

諸本の版種の考察や、『倭訓栞』後編が紆余曲折を経て出版に至った経緯などが報告されている。早くは『国語学書目解題』（一九〇二）に書誌情報が載せられているが、一部刊行年などに誤りがあり、北岡（一九六八）で指摘されている。また近年では、三澤（一九九五）によっていくつかの諸版本調査が行われている。

『倭訓栞』は『国書総目録』において三〇種程度が紹介されており、東大内においても六種の写本及び版本が確認されている。全国にはさらに膨大な数の存在が推定されるため、諸本の書誌はさらなる調査が必要である。

③出典や記述に関する研究

『倭訓栞』所引の資料が多岐にわたっていることは早くから指摘されている。しかし、『倭訓栞』の成立過程が複雑かつ未解明なこともあるためか、出典や所引資料に関する網羅的な調査は未だに行われていない。

方言資料を紹介したものには、「倭訓栞後編の方言」（東条一九三五）や「『倭訓栞』に見られる『物類称呼』の影響」（田島一九九九）、「『和訓栞』の方言資料『南留別志』について」（三澤二〇〇四）などが見られる。

また、『倭訓栞』では、『語意』や『新撰字鏡』といった近世初期に著されたり発見されたりした辞書類への言及も多く、三澤（二〇〇六a）などでは編纂が進むごとに扱う資料が増えている様子も指摘されている。

出典の中でも特に士清の著作『鋸屑譚』について取り上げたものに、「『鋸屑譚』小考」（吉崎久、一九七五）及び「鋸屑譚の辞書的価値」（後藤一日、一九八三）がある。ともに、『倭訓栞』の草稿的著作とも言われる『鋸屑譚』に特に注

目し、『倭訓栞』との比較からその性格を探っている。

『倭訓栞』で行われている記述は実証的であると言われているが、国語学的に定まった評価は無く、実証性について具体的に検討した論考も見あたらない。また、『倭訓栞』に収められた語彙の品詞分類や意味記述も含めて、数値を伴う細かいデータはほとんど提出されていない。

④成立時期や増補に関する研究

刊本『倭訓栞』の成立時期は、刊記によって特定されているが、士清が起稿した時期や稿本の脱稿時期などは分かっていない。そのため、『倭訓栞』諸研究の中で、何らかの形で成立年代に触れているものも多い。手法としては、士清にまつわる書簡から年代を分析したものや、所引資料の刊行年から『倭訓栞』編纂時期を推定しているものなどがある（北岡一九六八、一九七五、三澤二〇〇四、二〇〇六など）。

⑤谷川士清の思想や交友関係に関する研究

士清は多くの文人と交わりを持った。特に、晩年における本居宣長との交流は書簡に詳細が残っている。『倭訓栞』に関する記録としては、下書き段階で宣長の意見を仰いでいることや、士清の生前から宣長に序文を依頼していたことなどが知られる。『本居宣長全集』書簡集の他、加藤竹男氏や北岡四良氏の研究に詳しく、「倭訓栞と和字正濫鈔」（青木伶子、一九八六）にはそれら研究の要点がまとめられている。

ただし、士清が所引資料をどのように選別していたのかといったことや、幕藩体制に関する記述などがどのように扱われているかなど、『倭訓栞』の記述内容からそこに込められた思想を本格的に論じたものは見られない。宣長の時代に既に偽書と判じられている『旧事記』が多数引用されていることも含めて、士清の歴史観を明らかにし、『倭訓栞』成立の契機を探るためにも所引資料の検討は急務であろう。

⑥後世への影響に関する研究

『倭訓栞』が『雅言集覧』や『俚言集覧』に引用されていることは通説である。さらに明治期以降の近代辞書への影響も多く指摘されており、湯浅茂雄（一九九七）では『倭訓栞』が『言海』の意味記述や見出し立項に影響を与えている可能性が論じられている。

2　従来の研究の問題点と課題

従来の『倭訓栞』研究は、上述の如く問題点を含んでいる。さらに、「諸本調査の遅れ」「統計的データの不足」「士清の業績に対する評価の不正確性」の三つの観点から課題

を述べたい。

「諸本調査の遅れ」と「統計的データの不足」については、『倭訓栞』研究に限った話ではないが、研究の全体数が少ないこともあり特に感じられる面がある。三沢薫生氏によって清逸本（整版本刊行時に近い稿本の写本）や自筆本の調査が始まって以降、資料未見なるが故の通説が改められたり、新たな事実が浮かび上がったりした点が多い。稿本や下書きの類は「反古冢」に埋められてしまったとされるが、近世の出版物であるため版写本は全国に散在しており、本格的な書誌調査が俟たれる。

併せて、活字本使用についても指摘をしたい。『倭訓栞』は近世語の辞書として様々な場面で活用されてきたが、一般に流布する活字本は誤植や増補が多く、扱いが難しい代物である。そのことは北岡氏などが指摘してきたとおりだが、国語学関係の論文ですら、依然として『倭訓栞』の用例として活字本のみを引いているものがある。そのことが、さらに他分野の研究や一般の解説書などに悪影響を与えているのは明白である。

「統計的データ」に関しては、品詞分類ごとの見出し語数や所引資料の類別などの基礎データも体系的なものは発表されていない。例えば青木（一九八六）では、北岡氏の計測語数を参照した上で、

（略）三編の採集語にはそれぞれの特色が見られ、やはりそれは編者の言語意識の反映と考へられる。即ち前編は凡例に言ふが如く、古言雅語を中心とし収載項目数約七千五百、中編には俗語・方言をも収め口語的色彩強く、項目数九千六百餘り。（略）後編は約三千八百項目、動植物・固有名詞・外来語等の比率の高いことが特徴的である。勿論中編にも古語・外来語の収載あり、後編にも俗語が目立ちはするけれども、概して言ふならば、たとへば中編所載の古語は、古語の中ではやや雅ならざる感あるものが多い。（ペ二二八）

と、『倭訓栞』の収載語彙についての見解を示している。ただ具体例や詳細な数値に欠ける印象論であり、これをそのまま『倭訓栞』の特徴とは言えない。『倭訓栞』が幅広い分野の語彙を収めていることは広く指摘されるが、具体的にどのような語を雅語や古語、俗語などと認定しているのか、個々の研究でその態度を明らかにしたものを見ない。品詞ごとの語彙数調査に関しても同様で、士清が語の品詞をどのように捉えていたかを探ると同時に、継承可能なデータを整備することが必要である。

「士清の業績に対する評価の不正確性」に関しては、特に初期の研究や郷土誌における記述に見受けられる。

士清は同郷の国学者本居宣長に比べて全国的な知名度が

低く、その著作である『倭訓栞』も一般に広く知られた書物とは言い難い。そのため、『倭訓栞』や谷川士清に関して論じる時には、まずその概略を伝る事が多く、その過程に於いて事跡を取り上げた先行研究を部分的に引用した大雑把な記述が目に付く。一般向けの書などでそれをさらに孫引きしているものも多く、大幅な訂正が必要であることも多い。

倭訓栞の特徴は、「収録語彙数が多く、雅語や俗語、方言など多岐にわたっていること」「イロハ引きではなく、第二音節までを五十音順に排列していること」「多くの出典を挙げて実証的な記述がしてあること」などが挙げられているが、郷土の名士谷川士清の功績を伝えるために、郷土誌などを中心として読者に誤解を与えかねないような記述をしている事も多い。特に、「日本で初の五十音順排列の国語辞書」という記述が不正確な記述であることは、五十音の研究を見れば明らかである。

見出し語の数を計測した北岡（一九六八）では、その計測態度に関して以下の記述がある。

なほ、「栞」に収載されてゐる語彙の数量を、各編別に、五十音順に従つて掲げると次の表（略）のやうになる。但し標出された語彙の中には、国語としては、意味をなさない二音節語の標示もある。具体的に言へば、あ・あい・あう・あえ・あを……あら・あり・ある・あれ・あろといふ標出の下に語彙が並べられてゐるが、たとへば「あろ」などいふ国語は存しないから、単に標示のみにとどまつてゐる。次表には、これも数に含まれてゐる。このような収録態度を併記せずに、「『倭訓栞』の収載語彙数は二〇八九七語である」とのみ述べるのは、やはり誤解を招くことになり、不正確な記述とせねばなるまい。また、試みに整版本『倭訓栞』前編の語数を調査したところ、以下ように北岡氏の計測と差異が生じている。

（各部の上段が北岡氏の調査、下段が平井調査）

あ	325	327	せ	85	85	85	85
い	291	296	そ	110	109	109	109
う	226	228	た	235	239	239	239
え	56	60	ち	86	87	87	87
を	82	107	つ	221	223	223	223
か	441	418	て	91	92	92	92
き	106	116	と	219	219	219	219
く	211	212	な	210	211	211	211
け	93	94	に	98	98	98	98
こ	225	228	ぬ	73	73	73	73
さ	215	215	ね	86	86	86	86
し	300	299	の	93	93	93	93
す	145	145	は	211	213	213	213

ひ　224　224　よ　165　165　け　11　へ　13
ふ　156　157　ら　58　59　こ　1　ほ　4
へ　69　69　り　71　71　さ　0　ま　5
ほ　158　158　る　49　49　し　2　み　3
ま　215　219　れ　65　65　す　5　む　12
み　244　241　ろ　61　60　せ　13　め　7
む　139　139　わ　165　165　そ　4　も　10
め　89　89　ゐ　69　70　た　4　や　6
も　194　194　ゑ　68　68　ち　3　ゆ　9
や　210　211　お　368　370　つ　5　よ　7
ゆ　125　128　て　7　ら　20
と　5　り　35
な　1　る　39
に　9　れ　38
ぬ　20　ろ　26
ね　6　わ　19
の　5　ゐ　23
は　1　ゑ　24
ひ　4　お　7
ふ　3

一つひとつ手作業で数えた場合に誤差は生じ得るものではあるが、端数を含めた『倭訓栞』の見出し語数を語るためにも、見出し項目のテキストデータ化を進めるなどして、見出し語数の正確な再調査を行うことは不可欠である。

また、北岡氏の言う「標示のみの二音節語」の語数は次のようになり、かなりの数を占めることが分かる。

あ　1　を　8
い　5　か　3
う　5　き　5
え　20　く　4

これらの音節から始まる語が中編や後編で追加されることも多いが、基本的に中編や後編では標示のみの二音節語は

取らずに、該当する音節始まりの語が無ければ省略されている。ただし、中編のでも「うわ」など標示のみにとどまっているものがあるため、標示のみの二音節語の役割に関しても、データの拡充をとともに、今一度考察する必要がある（注3）。

『倭訓栞』は成立までに一一〇年を要した辞書であり、その間に日本は大きな社会変動を経験している。巻を分けて段階的に出版しているため、編纂過程で利用者の声を反映させている可能性もある。どのような意図のもとで『倭訓栞』の編纂が始まったのかを探る時、最終的に完成されたものと、谷川士清が目指そうとしていたものとを区別して考えねばならない。

「古語や雅語、俗語だけでなく、外来語や方言、有職故実など多彩な語彙を多数収めていること」が倭訓栞の特長だと言われる。しかし、それは整版本として完成された後の姿であり、どの語がどの段階で収載されていったのか分からなければ、全てを士清の業績として語ることはできない。おそらく士清自身も多方面にわたって語を集めたと思われるが、宣長を始め多くの文人との交流の中で増補を指摘された分野もあるであろうし、士清の没後に増補された箇所も多い（注4）。士清が当初意図したもの（自筆本など）と、生前に手掛けた最終段階（整版本前編の巻一三まで）、及び没後一〇〇年経って完成した『倭訓栞』の全体像を比べることで、「近代的」とされる辞書の目指された形が見えてくるのである。そしてそれを知ることで初めて、本格的に谷川士清の事跡を顕彰することが出来るのだろう。

3　自筆本の意義

自筆本について調査した三澤（二〇〇六）、及びその改訂稿である三澤（二〇〇八a）では、自筆本に収録された見出し語について、本記と増補部分を区別しながらも一部同一レベルで考察しているが、ここでは特に本記の重要性を述べたい。

自筆本『倭訓栞』では、一丁につき二四行（すなわち片面一二行）の罫線が引かれた用紙が使われており、用紙の上側と両端には増補可能な余白部分がある。自筆本の中でも、一行ずつ仕切られた罫線内部（以下罫線部）の記述は、増補の無い最も古い記述と認めることが出来る。そのため、倭訓栞成立の過程を追うためには、まず罫線部の本文を精査する必要がある。

自筆本の罫線部には二九三九個の見出し語を確認できる。また、各巻ごとの総丁数は、遊び紙を除いて以下の通りである。

巻一　六〇丁

巻二　七一丁
巻三　五九丁
巻四　六〇丁
巻五　六〇丁
巻六　六〇丁
巻七　六六丁

自筆本では部立てが変わるごとに丁を改めているが、部立ての末尾に未記入で罫線だけが印刷された空白ページが置かれている場合も多い。特に、ヲケコホムヤの各部末では空白が四丁以上に及ぶ。逆に、ラ行の部ではラリルレロ全てにおいて部末に空白ページは置かれていない（注5）。

あらかじめ丁数が固定された冊子を使用し、巻末に大量の空白ページが生じないように、部立てごとに適度な空白ページを挿入してバランスをとった可能性もあるが、それにしては部によって丁数に偏りが大きい。また、各巻の空白ページを増減させることで、巻二に見られる最大記述丁数の六三丁に統一させることが可能であり、巻ごとの丁数を統一するためだけに空白ページを挿入したとも考えにくい。和語の増加が期待できないラ行についてはまったく空白ページを挟んでいないことからも、編纂が進むに連れて増補が見込めるであろう部に関して、意図的に空白ページを挟んだと考える方が自然であろう。ただし、最終的に自筆本の罫線内本文にも訂正は入っているが、見出し語の増補は主に罫線部外の余白部分に記入されており、部の末尾にある未記入部分に追記された様子は見受けられない。

自筆本執筆の段階で、見出し語の増補だけでなく、既にある見出し語に出典や用例が追加されることも想定されていたはずであり、実際に自筆本から整版本にかけて記述が増加している例も多い。それにもかかわらず、自筆本では、見出し語ごとの間隔はすべて隙間無く記載されている。自筆本「総論」で、「此書五十音をもて次第し後のいう／江を省きぬれは四十七條を立たり各／條の下もまた五十音の序てによれり／捜覧に便あらしめんかため也」と書いてあるものの、実際に本文は一部を除いてそのような排列になっておらず、三澤（二〇〇六a）に指摘のある通り自筆本が草稿段階にあることは明白である（注6）。自筆本執筆開始段階では、後々の見出し語自体の増補は大いに考慮されつつも（注7）、すでにある見出し語の語釈に関してはある程度完成されたものとしていたのではないか。

このことからも、自筆本の罫線部をある段階における『倭訓栞』の完成形と捉えることが可能だと考えられ、当初士清が意図した『倭訓栞』の成立過程を解明するためにも、まずその内部検証が求められると言える。従来の研究を自筆本との対照で見直す必要は三澤氏が指摘している通りであるが、特に罫線部の本記との比較が必要となる所以であ

る。

4　おわりに

『倭訓栞』に関する諸課題を考察する中で、基本データの整備と諸本調査の充実という基礎研究こそが最優先事項であるとの決意を新たにした。膨大な研究対象なるが故にややもすると陥りがちな些末な調査報告では終わらせないということが、『和訓栞』を扱う上での一つの大きな課題なのであろう。

〈注〉

注1…「反古冢」は、津市指定文化財として、表に「反古冢」の文字、裏に「何故爾砕伎志身曽登人問婆其礼登答牟日本玉之譬」（何故に砕きし身そと人問はばそれと答えん日本魂）の歌が刻まれた石碑とともに、谷川神社（津市）境内に現存している。また、「反古冢」建立に関しては、宣長とやりとりした書簡が残る。士清が安永四年八月二〇日に宣長に宛てた書簡では、「扨拙者此迄所作ノ日本書紀通證、倭訓栞等埋メ申候而、上ニ反古冢ト記シ碑建申候」（『本居宣長全集別巻三』筑摩書房、一九九三）などと述べている。

注2…現在流布している活字本には二種類ある。一つは一八九八年に皇典講究所から出された『増補語林　倭訓栞』（伴信友校閲、井上頼圀・小杉榲邨増補、全三冊）であり、整版本『倭訓栞』の前編と中編の内容を合わせ、「を」と「お」の所属を正して排列し直し、増補を加えたものである。またもう一つは、一八九九年に美濃成美堂から刊行された『倭訓栞』（全三冊）である。この本も整版本『倭訓栞』をまとめて排列し直したものであるが、前編と中編に加えて後編を含み、「を」「お」の並びを正していない点で、前者に比べると整版本に近い体裁を保っていると考えられる。前者は一九六八年に名著刊行会から複製が出されて、より一般的に用いられている。後者は稀覯本とされてきたが、近年国立国会図書館の近代デジタルライブラリー（http://kindai.ndl.go.jp/index.html）によって、どちらの活字本も自由に利用することが可能となっている。

注3…いろは順が主流であった時代に、五十音順に不慣れな人のための道標として、たとえ該当する語句が無くとも前編にだけは標示だけの二音節語を置いていた可能性なども考えられる。

注4…三澤（二〇〇八b）で指摘されているが、例えば整版本『倭訓栞』の「やすらはで」の項目では、「……士逸さきに加茂季鷹か説をきくに赤染作といふ事たしかなる拠はなけれど……」という記述が見える。「士逸」とは士清の子「谷川士逸」のことである。士清の没後にその遺志を継いで『倭訓栞』編纂・刊行を続けており、その過程で増補も行っている。

注5…なお、ラ行に関して「和語の増加が期待できない」と考える

のは妥当であるが、その他の部を見てみると、自筆本から整版本へと項目数が増加する割合と、空白丁数の置かれ方とは必ずしも対応していないことが分かる（左表参照）。自筆本の段階では前中後編に分かれていないことを考慮しつつ、自筆本と整版本前編巻一三までの項目数とを比較してみると、自筆本から整版本前編に至る過程でほとんど増加がない「を」や「け」の部では四丁の空白が置かれているのに対して、大幅に増加する「か」や「さ」の部では空白の丁が全く付加されていない。「増補が見込めるであろう部に関して意図的に空白ページを置いた」と考えると、『倭訓栞』の編纂が進むに連れ、士清にとって自筆本編纂時には予想外であった語彙を増補することになったことが考えられる。整版本の「凡例

部	丁数	記述丁数	空白丁数	罫線内項目数	前編整版本項目数
総論	15	15	0	68	
あ	20	19	1	145	326
い	25	22	2	201	291
う	12	11	0	91	223
え	4	3	1	18	40
を	13	9	4	73	99
か	20	20	0	148	415
き	7	6	1	44	111
く	15	12	2	120	208
け	8	4	4	39	83
こ	17	12	5	99	227
さ	12	11	0	78	215
し	15	14	1	110	297
す	7	7	0	47	140
せ	4	2	1	29	72
そ	8	7	1	48	105
た	17	14	3	110	235
ち	5	4	1	37	84
つ	8	7	0	58	218
て	6	4	2	32	92
と	12	11	0	88	214
な	12	9	2	87	210
に	5	4	1	37	89
ぬ	3	3	0	20	53
ね	4	3	1	19	80
の	4	3	0	25	88
は	14	14	0	106	212
ひ	8	7	0	50	220
ふ	6	6	0	45	154
へ	4	2	1	21	56
ほ	12	7	4	69	154
ま	10	9	0	81	214
み	14	10	3	88	237
む	10	6	4	59	127
め	6	4	2	34	82
も	8	7	0	56	184
や	12	7	5	66	205
ゆ	9	5	3	44	119
よ	8	5	3	48	159
ら	1	1	0	12	39
り	1	1	0	9	36
る	1	0	0	6	10
れ	1	1	0	7	27
ろ	1	1	0	6	26
わ	7	6	0	58	146
ゐ	2	2	0	18	47
ゑ	4	2	1	20	44
お	19	15	3	165	363

・大綱」の部分に位置し、後に大幅な増補を受ける「総論」についても、空白の丁がまったく付されていないことは興味深い。

注6…未完成のまま製本したのは、まずは書物としての体裁を整えて、本居宣長なり執筆協力者なりに閲覧してもらい意見を仰ぐためであったか。あるいは、出版を依頼する京や江戸の版元に対する商品見本のためであったのかも知れない。

注7…自筆本は、一度製本された後に、宣長や弟子たちなどから意見を求めたり、自身の研究が進んで見直したりなどした結果を踏まえ、再度検討して校訂が加えられた状態だと推測できる。なお、筆跡から、増補部分も士清の自筆と考えられる。

〈主要参考文献〉

青木　伶子（一九八七）「倭訓栞と和字正濫鈔」（山田忠雄編『国語史学のために　第三巻　語誌・語史』）

赤堀　又次郎（一九〇二）『国語学書目解題』（吉川半七）

大川　茂雄・南　茂樹（一九〇四）『国学者伝記集成』（大日本図書）

大野　晋・大久保　正編（一九九三）『本居宣長全集別巻三』（筑摩書房）

尾崎　知光編（一九八四）『和訓栞　大綱』（勉誠社文庫一二二）

加藤　竹男（一九三四）『国学者谷川士清の研究』（湯川弘文社）

加藤　竹男（一九三九）「国学史上に於ける谷川士清の地位」（『国語と国文学』一六-一〇）

北岡　四良（一九六八）「倭訓栞成立私考」（『皇学館大学紀要』六）

北岡　四良（一九六九）「続倭訓栞成立私考」（『皇学館大学紀要』七）

北岡　四良（一九七二）「士清と宣長」（『皇学館大学紀要』一〇）

北岡　四良（一九七五）「谷川士清覚書」（『皇学館大学紀要』一三）

後藤　一日（一九八三）「鋸屑譚の辞書的価値」（『国学院雑誌』八四-三）

篠崎　久躬・浦上　正明（一九七四）「『倭訓栞後編』の諸国方言索引」（『近代語研究』四）

竹内　令（二〇〇八）『近代国語辞典の祖谷川士清』（私家版）

田島　優（一九九九）「『倭訓栞』に見られる『物類称呼』の影響」（『同朋文学』二九）

谷川士清先生事蹟顕彰会（一九一一）『谷川士清先生伝』（大日本図書）

東条　操（一九三五）「倭訓栞後編の方言」（『国語と国文学』一二-九）

三澤　成博（二〇〇四）「『和訓栞』の方言資料『南留別志』について」（『和洋国文研究』三九）

三澤　成博（一九九五）「『和訓栞』の版種小考」（『和洋国文研究』三〇）

三澤　成博（一九九六）「整版本『和訓栞』と翻刻本『和訓栞』」（『和洋国文研究』三一）

三澤　成博（一九九八）「『和訓栞』所引の下学集について」（『語文（日本大学）』一〇〇）

（ひらい　あもん　大学院人文社会系研究科　博士課程二年）

三澤　薫生（二〇〇五）「『和訓栞』原本の復元（一）見出し項目について」（『和洋女子大学紀要』（人文系編）四五）
三澤　薫生（二〇〇六ａ）「谷川士清自筆『和訓栞』について」（『和洋国文研究』四一）
三澤　薫生（二〇〇六ｂ）「『和訓栞』原本の復元（二）見出し項目について」（『和洋女子大学紀要』（人文系編）四六）
三澤　薫生（二〇〇七ａ）「もう一つの『和訓栞』稿本・『俚言集覧』の『和訓栞』について」（『和洋国文研究』四二）
三澤　薫生（二〇〇七ｂ）「『和訓栞』原本の復元（三）見出し項目について」（『和洋女子大学紀要』（人文系編）四七）
三澤　薫生（二〇〇八ａ）『谷川士清自筆本倭訓栞　影印・研究・索引』（勉誠出版）
三澤　薫生（二〇〇八ｂ）「河北景楨筆、谷川清逸書写『和訓栞』稿本について（上）」（『和洋女子大学紀要』（人文系編）四八）
三澤　薫生（二〇〇八ｃ）「『和訓栞』に見る谷川士清見聞の記事」（『和洋国文研究』四三）
湯浅　茂雄（一九九七）「『言海』と近世辞書」（『国語学』一八八）
湯浅　茂雄（二〇〇二）「『訂正増補　和英英和語林集成』『和英の部』の増補と『和訓栞』『雅言集覧』『官版　語彙』」（『国語学』五三）
吉崎　久（一九七五）「『鋸屑譚』小考」（『皇學館論叢』八-三）
三重県教育会（一九四二）『郷土三重』